

シンポジウム 1：学生時代から行う国際交流の意義**4. 国際交流から学生が学ぶこと**

柳田 潤一郎*

〔Key Words〕国際交流、神戸常盤大学国際交流センター、大学コンソーシアムひょうご神戸、ネパール

はじめに

「百聞は一見にしかず」。講義の内容を実験や実習で確かめてみる。学校で習ったことを実際に病院で臨地実習として体験してみる。その体験は個人差もあるが、人によっては強い印象を得る場合がある。これが国際交流となると、習慣や文化だけでなく、風景や言葉、味や匂い(臭い)、そして宗教も違う。前もって書籍や資料で調べて行ったとしても、それが納得のいくものであっても、あるいはまったく違っていたとしても大変強烈な体験となる。

国際交流から学生が得ることは多大である。筆者が関わっている狭い範囲そして短い期間の国際交流できえ、参加した学生のビフォーア・アフターの変化に驚かされる。

できるだけ同じ医療技術習得を目指している現地の同世代の学生との交流、及びフィールドワークを通して国際保健医療を垣間見る、あるいは考えるキッカケ作りとなるよう催行している。渡航前、日頃の講義・実習や臨地実習などで事前学習の準備不足や、英語が不得手と二の足を踏んでいた学生達が、現地学生と一緒にフィールドワーク及び交流会での踊り、そしてホームステイを通し、わずか 10 日間の現地生活を過ごし帰国時に涙す

るのを見ると、現地で世話になる人々のホスピタリティの良さもあるのだが、ここに学びの原点があるように思う。

さらに、英語が不得手と言っていた学生が、帰国後とも簡単に現地の学生とメールのやり取りをしている、もちろん英語で。

本稿では、本学が行っている小さな国際交流の現状を紹介する。筆者は国際交流センターの一員として主にネパールとの交流に携わっており、ネパールを通した事例を中心に記述する。また、過去に行った JICA(国際協力機構)の研修や草の根技術協力事業の実施についても触れたい。

I. 神戸常盤大学国際交流センター

2002 年 4 月、国際化・情報化社会における多様化する学びに対応するために、共に生き、共に学ぶ「共生」の理念のもとに、エクステンションセンターが設立された。さらにこのセンターの国際交流と地域交流そして生涯教育の三つのフィールドの活動が発展して、2012 年に本学在学生と卒業生、そして一般社会人と、さらに外国人が共に学び交流できる場として国際交流センターが設立された。本学では、この国際交流センターが「学生時代から行う国際交流」として、現在 2 つの交流事業を進めている。

*神戸常盤大学保健科学部医療検査学科 jyanagida@kobe-tokiwa.ac.jp

この他に、JICA青年海外協力隊OBの活動報告会や外国人講師による英語講座、外国人学生のインターンシップ受け入れ事業も行っている。

II. ネパールとの交換研修生派遣制度

その一つは、本学後援会および同窓会からの援助を受けているネパールとの交換研修生派遣制度である。1997年秋に本学同窓会とネパール政府公認NGOであるハチガンダ福祉協会(Hattigaunda Welfare Society : HWS)との間で姉妹提携が結ばれ、隔年ごとに本学の学生・卒業生とネパールの学生・社会人が相互訪問し研修を行うというプログラムである。本学から全学科の学生6~10名と卒業生が現地の病院・医療関連施設や学校を訪問し、医療現場や教育体制の厳しい状況を知り、またホームステイを通して現地の文化や生活を体験し、10日間で多くのことを学んでいる。また、帰国してからも体験報告やネパールからの研修生の世話役やホームステイ先になるなど、地道な国際交流を進めている(写真1)。

ネパールからの研修生は主に医療系の大学生または社会人であるが、原則としてネパールへ訪

問した日本人研修生の家庭でホームステイしながら本学での講義・実習に参加し、また兵庫県内の医療・教育施設での研修を受けている。もちろんネパールの現状報告会や交流会、そして観光案内も行っているが、ほぼ学生主体で行っている。

このようにネパール、日本の両国の研修生は、異文化交流を通じて、両国の環境、医療、教育などの課題について理解を深めている。

III. 大学コンソーシアムひょうご神戸

もう一つの交流として、本学は「大学コンソーシアムひょうご神戸」に参加し、2011年度より、協定大学との単位互換制度として「国際保健医療活動II」を夏季集中講座として実施している。医療技術系、看護系および栄養系の学生を中心に5~10名が参加し、本学学生の他に、これまでに神戸大学、神戸女子大学、甲南女子大学および近大姫路大学の学生達が参加した。

実際に海外を体験し、日本との医療施設や保健活動の比較、どのような国際貢献ができるか、日本では何が必要か、などを理解し考えることを目標としている。アメリカ、フィリピン、ネパール



写真1 ネパールとの交換研修・ホームステイ先の家族と
(2014年度ネパール交流)

の3カ国から1カ国を選び、本学での事前研修を行った後、現地で約1週間の研修を実施している。それぞれ文化的にも社会的にも異なる国で主に医療・保健関連施設の見学やフィールドワークを行い、帰国後は報告会や討論会を通じて、日本を含めた4カ国について比較検討を行っている。

この体験が、途上国における貧困、医療、教育など先進国とは大きな差がある課題について理解を深め、国際保健医療に興味を持ち、将来的には大学院進学、青年海外協力隊や国際的なボランティア活動、さらには災害救助活動につながっていくことを期待している(表、写真2~4)。

表 2015年度大学コンソーシアムひょうご神戸、ネパールコース スケジュール

日 程	AM	PM
3/16(1日目)	OSA > TG673 > BKK > TG319 > KTM カトマンズ(ネパール)到着	
3/17(2日目)	ネパール医科大学 ネパール医科大学病院 見学	小学校訪問 (糞便検査の容器配布)
3/18(3日目)	小学校訪問 (検体回収)	検体のホルマリン固定
3/19(4日目)	セレモニー/現地の学生との交流	
3/20(5日目)	プレゼン発表	T.U.Teaching Hospital 見学
3/21(6日目)	水質調査	観光
3/22(7日目)	KTM > TG320 > BKK > TG622 > OSA 大阪(日本)帰国(3/23早朝到着)	



写真2 ネパール医科大学にて
(2015年度大学コンソーシアムひょうご神戸)



写真3 交流会にて震災義援金贈呈式
(2015年度大学コンソーシアムひょうご神戸)



写真4 JICA草の根技術協力事業に参加
(2014年度大学コンソーシアムひょうご神戸)

III. JICA課題別研修および青年研修

2002年から2011年に実施した食品微生物検査技術コース(東南アジア諸国から5~8名参加)では、毎年、筆者を含め数人の教員が全研修期間3か月のうち約2週間を講師として研修の一部を担当した。

2008年から2010年に実施したアフリカ仏語圏地域保健能力向上コース(8~10名参加)では、本学の教員がコースリーダーを担当し、筆者を含め数人の教員が全研修期間約3週間にわたり講義・実習を担当した。

この研修では、ほぼすべてのコースで学生との交流を行い、また学生が実習の準備や補助として

活動し、日本にいながら国際交流を経験することとなった。

IV. JICA 草の根技術協力事業

2012年4月から2015年3月まで3年間実施した草の根協力支援型事業である。

本学では2002年から2010年まで、ネパール医科大学との学術交流協定に基づき、毎年ネパール・カトマンズ市近郊、およびポカラ市近郊の住民の健康調査を実施してきた。筆者を含め数人の教員が現地に赴き現地研究者と共に調査を行った。結果として、感染性下痢症と寄生虫症の罹患、生活水の汚染および近代化に伴う生活習慣病の増加を確認した。

この調査をもとに、ネパール側の研究者と共に、草の根協力事業をJICAに提案・応募した。その結果、平成23年度(2011年度)「ネパール・カースキ郡ディタール村の生活改善－安全な水の供給推進－」事業として採択された。日本側の実施体制は、本学教員を中心に、神戸大学、森ノ宮医療大学、兵庫県、神戸市に所属する教職員で構成される支援組織。ネパール側としては、NITMPHR(National Institute of Tropical Medicine & Public Health Research)を主体としたネパール医科大学およびポカラ公衆衛生研究所の教職員、そして山岳地域にある現地ディタール村の支援組織であった。主な活動は、砂ろ過装置の設置、住民に対しての健康調査・公衆衛生に関する啓蒙活動そして村の水管理組織の構築であった。

2013年度および2014年度の大学コンソーシアム・ネパールコース参加学生は現地に入り健康調査および水質検査に参加し、まさに国際保健医療、とくに途上国の医療事情を体験した。

V. まとめ

現在行っているどちらのコースも、大きな目標は「国際保健医療活動」である。どのような地域で、誰を対象に何を行うか、を考えなければならないし、また物を持っていくのか、人が入るのか、短期的か長期的か、など国際保健活動の場と対象は様々である。

学生にはこの色々なステージの一部でも良いので垣間見て、国際保健活動の困難さや重要性を少しでも肌で感じて欲しいと思っている。

これだけ世界の情報があふれているにもかかわらず、学生時代に実際に国際交流に関わることは多いとは言えない。「学生時代から行う国際交流」での体験は、これから色々なことを考えていくまでの一つのツールとなりうるのではないかと考えている。

参加した学生のビフォーア・アフターの変わりように驚くことは前述したが、やはり金銭的に、時間的に制約されることもあり、色々な事情で参加を断念した学生のために、交換研修生派遣での現地医療系大学との交流やコンソーシアム・ネパールコースの活動など、幸運にも「現場」を体験した学生の様子と声を紹介し、参加できなかった方にも「現場体験」をどのような形で報告できるかを考えている。

先日、本学卒業生が就職後5年目に青年海外協力隊員となり、2年間アフリカ・マラウイに滞在し検査技師教育に携わった経験を在学生に話してくれた。きっかけはネパール交換研修生としてネパールを訪問したことだと語っていた。また、機会があればもう一度アフリカで働きたいとも。

学生の国際交流に関わっているものとしては大変うれしかった。これから一人でも多くの学生が海外に目を向けてくれることを願っている。

ただ、海外に行くあるいは海外で住むとなると色々な面でリスクが多くなる。治安、衛生状態やテロ活動などに十分に気を配る必要がある。個人的な話で恐縮だが、筆者の大学院時代の友人が、JICAの技術専門家としてアフリカに滞在して活躍中だったのだが、惜しいことに交通事故で亡くなられた。途上国では何が起こるかわからない。渡航前の情報を十分に理解していても現地では全く違うこともある。学生の安全を最優先しながら予定の変更や中止など臨機応変に判断していくことが必要である。

最後に、本誌上ではふさわしくないかもしれないが、2014年度学内広報誌に書いた拙文を、許可を頂き原文のまま掲載する。

『リレーエッセイ 映画のようなワンシーン』

医療検査学科 柳田潤一郎

今年も学生の皆さんとネパールに行ってきた。日本とはずいぶん違う文化や生活様式に驚かされると同時に思わぬことが起こる。

急に実施されるゼネスト。ネパール語では「バンダ」というのだが、バスやタクシーなどの公共交通機関はもちろん、バイクや自家用車もストップ。街に出ようとすると歩くしかない。軍や警察が出ているからできるだけ外に出ないように、と言われ、その日の予定はキャンセル。どうにもならない。

さて、今年は予定通りのスケジュールをこなしカトマンズにもどった。さあ、もう2日間だね、と言いながら朝食を食べていたのだが、A君とB君はまだ寝ているのか、起きてこない。C君に、フロントから部屋にデンワして早く食事に来るよ

うに言ってきて、と頼んだ。

C君が戻って来て、起きているのだけれど部屋から出られないそうです、という。最初どういうことか真意がつかめなかった。どうもカギがかかってしまい外に出られなくなっているという。

あわてて皆で6階まで上がってみると、小柄なホテルのマネージャーが部屋の壁の上部にある小さな窓から部屋に入りカギを開けようとしていた。なんでも、マスターKEYでも無理で金切りのこぎりで切って開けようとしているらしい。しかしそれも無理。とうとう外から大柄な若いホテルの従業員の兄ちゃんが体当たりを喰らわすことに。

ダダダダッ！ バーン！ 開…い…た！

壊れたドアの向こうにA君とB君がボーゼンと立っていた。何だか、ジャッキー・チェンが出てくる香港映画のワンシーンのような。

見ていた私たちが爆笑したのは言うまでもない。